

なぜ実習生は日誌を書くのか

ーソクラテスとパイドロスの対話を手がかりにしてー

聖徳大学児童学部 小田桐 忍 (003115)

[キーワード] 養成校、日誌、ソクラテス

1. 研究目的

筆者の勤務校は指定保育士養成施設（以下「養成校」）の一つとして実習生を実習先に送り出す立場にある。筆者は、特に「保育実習Ⅰ（施設）」という開設科目の担当者の一人として、勤務校では、当該実習指導に係る事前・事中・事後の各種の対応を行っている。その中でも実習中の記録（以下「日誌」）を執筆することの動機づけと日誌の執筆トレーニングは事前対応のメニューの中で大きく、そして重要な部分を占めることになる。そこで本研究では、なぜ実習生は実習期間中に日誌を書かなければいけないのか、という一見すると当たり前に思われがちなことについて、実習生の理解が求められるよう何らかの筆者なりの回答を与えてみたいと思う。

2. 研究の視点および方法

如上の目的を達成するために、本研究では、筆者は『プラトン全集』（岩波書店）の第五巻（1974年）に収録されている「パイドロス」（藤沢令夫訳）を精読する。その上で、精読の成果に基づいて、①自分自身を観察することについて、②真剣に熱意をもって語りかけることについて、詳細に検討することにしよう。

3. 倫理的配慮

本研究において、筆者は一般社団法人日本社会福祉学会の定める研究倫理指針（以下「指針」という）を順守する。筆者は、研究過程および結果を公表するに当たり、良識と知的誠実さと倫理が要請されることを自覚し、指針に則って活動するものであり、自己の研究水準の向上のために日々精進している。

4. 研究結果

①自分自身を観察することについて

自分を知るということについては、誰もがソクラテス（B. C. 469-399）の言葉をすぐに思い浮かべる。「汝自身を知れ」がそれである。しかしこれはソクラテスの言葉ではない。デルフォイのアポロン神殿に刻まれていた言葉であると伝えられている。ソクラテスは、この言葉の真意を理解できず、結局「自らの無知を自覚せよ」という意味に解釈することになった。ソクラテスでさえ、自分自身を観察した結果、無知であることに気づいた。故に、私たちはなお一層謙虚に学ばなければならない。

ところで、汝自身を知るための具体的方法に関わる一つの示唆を与えてくれるのは、モンテーニュ（1533-92）の『エッセー』（あるいは『随想録』と訳されるときも）である。当初彼は書きものをしようと考えたものの、何を書いてよいか分からなかった。そのうち、自分について書くことを思いついたが、書く手がかりが見当たらない。そこで、彼は、書くための

拠り所として、自分自身を自分の前に置いて、書く対象とすることにした。彼は、対象としての自分自身について書く。彼によれば、自分自身を自分の前に置くことは、知ることの手がかりだった。そして、彼は「正直に的確に逐一書き留める」ことが貴重な結果をもたらすことになると考えた。

②真剣に熱意をもって語りかけることについて

ソクラテスはその生涯において一冊も自著を認めることがなかった。ソクラテスに関する記述は彼の弟子たちによって行われた。その中でも特にプラトン (B.C. 427-347) が対話形式の著作の登場人物としてソクラテスを書き記している。それでは、なぜソクラテスは自ら書かなかったのか。『パイドロス』からその答えを探してみたい。

ソクラテスは、パイドロスにこう説明している。書くという行為には、次のような困った点がある。その事情は、絵画の場合と似ている。絵画が創り出したものも、それはあたかも生きているかのように立っているが、何かを質問すると、尊大に沈黙して答えない。書かれた言葉もあたかも実際に何かを考えているかのように思える。だが、そこで言われている事柄について、何か教えてもらおうと思っても、いつでも同じ合図をするだけである。言葉は一度書きものにされると、どんな言葉も転々とめぐり歩く。そして、ぜひ話しかけなければならない人びとにだけ話しかけ、そうでない人びとには黙っていることができない。自分だけの力では身を守ることも自分を助けることもできない。

彼によれば、一度書いてしまうと、「語るべき人に語り、黙すべき人には黙す」ということができなくなってしまう。「語るべき人」に語りかける言葉は「魂をもつ言葉」だ。書かれてしまった言葉は、その影にすぎない。もし語るのに相応しい人の心に向けて、「真剣に熱意をもって」語りかけるならば、魂のある言葉は相手の心に植え込まれ、その種子が相手の中に新鮮な言葉となって生育することになる。ちょうど農業を営む者が種子を大切に育て、適切な場所に適正な仕方ですくように、言葉の正しい用い方は大切であり、水の中に投げ込むように書くのは虚しいと考えた。だからソクラテスは書かなかった。

ソクラテスはこうも言っている。「真剣に熱意をもって」言葉を相手の心に植え込むというのは、決して説得を目指し、訓育する姿勢を取ることはない。また難しい用語で述べることもない。日常一般に使われている言葉で、相手が正しく受け取り、適切に考えることができるような語りかけこそが大切なのである。

5. 考察

本研究で取り上げたソクラテスの姿勢は、日誌の記述の方針としても有益であるように思われる。そもそも日誌は、不特定多数の読者に向けて、書かれるものではない。あるときは実習担当者であったり、あるときは園長や施設長であったり、そしてまたあるときは巡回担当教員であったりする。そうしたときはどんな文章が望ましいのか。ソクラテスの言葉を引用するまでもなく、「真剣に熱意をもって」書かれた文章である。言い換えれば、熱意なくして、保育者になれるはずがない。ソクラテスが書かなかったのと同じ意味で、実習生は書くことが重要であると筆者は思っている。